

この度、東洋哲学研究所が創立五十周年を迎えられたことはまことにおめでたいことであり、心から祝福したい。

私が研究所にいちばん親しくさせて頂いたのは、一九七〇年代の終りから一九八〇年代の前半であった。東京大学印度哲学研究室助手から、東方学院研究員時代であった。その頃、研究所は代々木上原にあった。

「日本仏教」の特集を編んだ頃

末木文美士

み、中国思想の流れの中で位置づけなければならぬことを説いて、学生に絶大な影響を与えた。私もその末席に連なつて、感激した一人であった。

福永先生は、文献を読むのにまず索引を作るという基礎的な作業から始めることを教えられたが、東洋哲学研究所はいち早く先生の指導のもとに『法華経一字索引』（一九七七）を編纂出版して、画期的な成果を挙げた。先生が

京都に帰られ

た後も、ぜひ

先生の講義を

聞きたいとい

うので、研究所にお願いして、特別セミナーを開いて頂いたこともあった。東哲というと、まずこの福永ゼミのことが思い出される。

私は田村芳朗先生の指導下に日本仏教を専門として研究を始めたが、何しろ日本仏教を専門とする学生は他にいない状態で、手探りで試行錯誤していかなければならなかった。その頃、一九七四年から五年間、京都大学人文科学研究所から福永光司先生が東京大学の中国哲学研究室に赴任された。先生の専門は中国の道教であるが、中国仏教に関しても漢文をしつかりと読

雑誌『東洋学術研究』は、現在は現代の宗教や平和の問題が中心で、もちろんそれは意義が大きいが、その頃は古典的な仏教学の論文が多く、そのお世話になることが多かった。私自身、二四巻二号（一九八五）で

日本仏教の特集を編ませて頂いた。これは、史学・美術史・文学・宗教学など、さまざまな分野の若い人に、それぞれの分野の研究史や研究方法を書いてもらうというもので、私にとっても非常によい勉強になった。

あの頃に較べると、近年の研究所の活発な活動は目を見張るばかりであるが、あの頃のいかにも手作りの活動も懐かしく思い出される。

(すえき ふみひこ／国際日本文化研究センター教授、
東京大学名誉教授)

本誌『東洋学術研究』は創刊号を1962年11月に発刊。今号(第50巻第2号)で通算167号となる(現在は年2回刊)。「The Journal of Oriental Studies」(『東洋学術研究』英語版)は1987年に創刊。年1回発刊している。

